鋼構造委員会・今後の鋼構造研究のあり方に関する調査研究小委員会
第1回小委員会 議事録（案）

日時：2024年 8月 6日 10:00-12:00
場所：土木学会F会議室＋オンライン
参加者：長山、古川、佐々木、廣畑、北根、杉本、西尾(議事録担当)、加納、中村、
杉山、北市、服部、網谷（下線はオンライン、順不同・敬称略）（欠席：下里）

議事内容

１．趣意説明

- 長山委員長より、小委員会設置の趣意が説明された

２．委員紹介

- 各委員より、自己紹介が行われた

３．委員会の進め方について

- 長山委員長より、小委員会の進め方とまとめ方の案が説明された（※配布資料）
  - 今後「5年」「10年」「30年」で期待される研究・アクションとして、各カテゴリで2-3トピックについてまとめて、小委員会としての提言とする
    - トピックの切り口は研究別（疲労・溶接、ボルト、..など）または鋼構造分野の課題別（組織・体制、..など）が考えられる
    - 合計7-8トピックについて担当者を決めて、小委員会ごとに各トピックについて進捗を紹介して議論してまとめていく
    - 各トピックで、PPT 1-2枚（A4）のをテーマ案まとめる、多数のテーマを羅列するのではなく1 テーマ 1 段落程度の分量
  - 国土交通省等での参考となる取組みが紹介された
    - 国交省の「道路行政の技術開発ニーズ一覧」
    - 新技術導入促進Ⅱ型（本小委員会の対象はより研究寄りのトピック）
    - インフラメンテナンス国民会議のニーズ・シーズリスト
    - 科学技術予測調査
  - まとめ方（出口）のイメージとして「インフラメンテナンス曼荼羅」（大谷翔平曼荼羅）が紹介された
  - 今後4回の小委員会では、各回で話題提供3件程度と、各トピックについて素案作成の進捗を紹介して、議論を実施していく

- 委員会の進め方等について、参加委員で意見交換が実施された。主な意見は以下の通りである。

- 構造全体系として（橋全体としてどうあるべきか）の議論がなされたほうがよい。トピックの切り口は構造単位（橋梁、港湾構造物、基礎、..）で分けるのはどうか。またカーボンニュートラルは入れたほうがよい。将来に向けて、実プロジェクトがある保証はなくても研究しておく仕組みが必要である（杉山委員）
- 国際的な動きをみながら議論を行ったほうがよい。示方書の切り口でトピックを設定してはどうか（佐々木委員）
- トピックの切り口は研究別より大きな課題別のほうがまとめやすい（経年劣化、人材育成、省力化施工、国際競争力、..など）（網谷委員）
- 日本鋼構造協会JSSCに、鋼構造未来戦略小委員会（2020-2025、中村先生・都立大が委員長）での活動があるので、どのような議論がなされているか確認したほうがよい（北根委員）
- 実プロジェクトでの課題は業務として対応しておりプロジェクトがないと検討が終わってしまうが、深掘りして一般化する課題はある。産学との連携で研究していく仕組みが必要である（中村委員）
- 実務では目先の課題への対応が大変で深掘りはできない（服部委員）
- 産官学連携については、学のほうでも研究活動評価や外部資金獲得に向けて求められる取組みとのミスマッチがおきている（西尾委員）
- 大学においても予算確保・評価を考えて研究テーマが偏ってしまう、他分野への展開（浮体構造など）という切り口があってもいいかも（杉本委員）
- 課題に単発で対応していても面白くない。例えばDX関連についても、限定的で短期的な課題に対応する取組みになっている。もっと底上げや普及につながる取組みがもとめられる（加納委員）
- 2-3年で成果にならないと継続できない。国際的にはコンクリートが主流で鋼橋は難解と言われる。これまで積み上げられた知見や技術を上手く継承することも、新しい人も入ってこられるようにするために必要である。新技術の適用は、立ち位置がはっきりしていないのに対応しないといけない（北市委員）

- 次回委員会に向けて、これから1-2週間のうちに、全委員からメールベースで小委員会の進め方やトピックの切り口への意見を収集し、長山委員長が取りまとめてトピックを設定することになった。

４．次回小委員会開催について

- 12月24日(火) 15:00-17:00 会場は土木学会Ｄ会議室
- 話題提供は2件、① 中村先生(都市大)よりJSSCの取組み紹介、② 野澤様(JRC)に依頼することとなった